

## 救いの年は来る

丸山 勉

[聖書] イザヤ書 61章 1節～3、8～11節

主はわたしに油を注ぎ 主なる神の霊がわたしをとらえた。  
わたしを遣わして 貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。  
打ち砕かれた心を包み 捕らわれ人には自由を  
つながれている人には解放を告知させるために。  
主が恵みをお与えになる年  
わたしたちの神が報復される日を告知して 嘆いている人々を慰め  
シオンのゆえに嘆いている人々に 灰に代えて冠をかぶらせ  
嘆きに代えて喜びの香油を  
暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。

主なるわたしは正義を愛し、献げ物の強奪を憎む。  
まことをもって彼らの労苦に報い とこしえの契約を彼らと結ぶ。  
彼らの一族は国々に知られ 子孫は諸国の民に知られるようになる。  
彼らを見る人はすべて認めるであろう これこそ、主の祝福を受けた一族である、と。  
わたしは主によって喜び楽しみ わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。  
主は救いの衣をわたしに着せ 恵みの晴れ着をまとわせてくださる。  
花婿のように輝きの冠をかぶらせ 花嫁のように宝石で飾ってくださる。  
大地が草の芽を萌えいでさせ 園が蒔かれた種を芽生えさせるように  
主なる神はすべての民の前で 恵みと栄誉を芽生えさせてくださる。

[序] 人間に明るい未来はあるのか

この世の中に、いわゆるユートピア（理想郷）が出来たらいいな、と昔から多くの者たちが考えました。16世紀の初めには、トマス・モアという人文主義者が、文字通り『ユートピア』（「どこにもない国」の意味）という本を著しました。それは、当時のイングランドの制度や社会を批判して書かれたものでした。モアは、自然に従って生き、私有財産を持たないある意味理想的な共同社会を考えました。働く時間も6時間までで、余暇は教養を高めるために充てて、他国と争うことはしない国を考えました。ただ、ひどい犯罪人は、奴隷として働かなければならないということも書いてあります。理想と言っても、やはり人間が考えた限界があります。

これまでの歴史で、人類が作ってきたどんな社会制度も、その出発点はどれも**国としての理想**を考えてのことだと思えます。しかし、残念ながら、これまで理想的

国家というものはなかったと言わざるを得ません。理想を掲げて、他国に戦争を仕掛ける、その国の人々を蹂躪する、といったひどい歴史が様々な国でありましたし、それは、私たちの国も例外ではありませんよね。愚かな戦争というものを繰り返してしまう私たち人間という者に、明るい未来はあるのか、と暗い気持ちになってしまうのもあり得る事だと思います。

現実の世の中にもう期待が持てない私たちは、代わり映えのない日々の生活を淡々と繰り返す、何か大きなヴィジョンや夢を持ちながら生きる、ということからは遠くなってしまっているようにも思います。いえ、かく言う私自身が、若い頃、全く生きていく空しさに捕らわれてしまっていた時がありました。

### [1] キング牧師が立っていた聖書の言葉

それでは聖書は、人間に対して、或いは歴史に対して、「あきらめろ」と、絶望を語るのでしょうか？そうではありません。むしろ逆です。

今日のテキストはイザヤ書の 61 章ですが、この冒頭には全ての人にもたらされる神様の救いの告知が、主に油注がれた者によってなされる、ということが預言されています。「油注がれた者」とは、神様のわざをなすために特別に選ばれた者であり、それは王であり、また、預言者であり、祭司であり、特にそれはメシア＝救い主としての働きを担う者に対する言葉です。この油注がれた者には、特別な使命が与えられました。61：1 をお読みします。

主はわたしに油を注ぎ 主なる神の霊がわたしをとらえた。  
わたしを遣わして 貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。  
打ち砕かれた心を包み 捕らわれ人には自由を  
つながれている人には解放を告知させるために。

何と具体的なことでしょうか！私たちは宗教的救いというと、安心立命とか、抽象的なことを考えやすいですが、ここで語られていることは、社会的と言っても良いような救いと解放のわざです。

ここで、少し話が逸れるようですけれども、キング牧師の話をさせて下さい。

生きていれば今年 89 才である、あのマーチン・ルーサー・キング牧師の演説の中にこのような言葉があるそうです。

「私たちは違う船でやって来た。しかし今、同じ船に乗っているではないか！」。

いわゆる黒人差別をする側と、それをなくそうとする側の人々双方に向かったの言葉です。ここでの「同じ船」とは、直接的にはアメリカ合衆国のことをいっていると思います。このアメリカに、白人の先祖はメイフラワー号に乗ってやって来、黒人

の先祖は**奴隷船ブルックス号**でやって来ました。これはそれぞれの確かな「歴史」です。つまり、この大陸に辿り着いた理由も経緯も全く違う訳ですが、不思議に今、この同じ国で生きている。キング牧師は、その中に、歴史を貫き、自分たちの思いを超えて働き給う神のわざを見たに相違ないと思います。そして、それが、あの有名な言葉、「**アイ・ハブ・ア・ドリーム・ザット・ワンデイ…**」に繋がってゆきました。

あの演説の中で、キング牧師は、一般的な意味の「夢（ドリーム）」「理想」を語っているのではないのです。彼は**旧約聖書の預言の言葉**を引用しながら演説しました。例えば、**アモス書 5:24** を引用しながら、「正義が河水のように流れ下り、公正が力強い急流となって流れ落ちるまで、われわれは決して満足することはない」と言います。そして、バビロン捕囚の只中で語られた**イザヤ書 40:4~5** の言葉も引用しながらこう語ります。

「私には夢がある。それは、いつの日か、あらゆる谷が高められ、あらゆる丘と山は低められ、でこぼこした所は平らにならされ、曲がった道がまっすぐにされ、そして神の栄光が啓示され、生きとし生けるものがその栄光を共に見ることになるという夢である。」

キング牧師は、自分の思想を語ったと言うよりも、その根っ子には、**揺るがない聖書の約束の言葉**がありました。そして、**私はそれに堅く立つ**、と。“差別も貧しさも、人間社会の産物だ。ずっと続くわけではない。神様は、必ず私たちを顧みて下さる。あきらめることなく、絶望することなく進んで行こうではないか”と語ったのです。その結果、どうですか。神様は歴史を支配しておられます。肌の色で人が差別されない社会、黒人も公民権を持つ社会へと動いていきました。そして、今から約 10 年前には、アメリカで黒人の大統領も生まれたことを、私たちはよく知っています。聖書は、過去の歴史書ではありません。それは、今も、「**神生き給う**」ことを、変わらずに証しているのです。

## [2] ヨベルの年

そして、この**イザヤ書 61 章**ですが、書かれた時代は、なかなか辛い時代でした。60 年間という長い期間**バビロニアに連れて行かれて、ようやく祖国に帰還**することが出来ました。それ自体大きな事でしたけれど、それまで信仰的拠り所であった**エルサレム神殿は崩壊**し、その復興もままなりません。捕囚にされずにエルサレムに残された貧しい人々は、町を再建しようという意欲が持てずじまいです。世代も移り代わっています。町の中には、**貧しい人、打ち砕かれた人、捕らわれ人**が多くおりました。ここでの捕らわれ人とは、捕囚民ではなく、貧しさのゆえ、多くの負債を抱え、それを返せずじまいにいた為、獄の中に入れられた人々のことのようなのです。生きていく希望がかき消されるような状況ではないでしょうか。

そういう現実の中で、イザヤ書は、油注がれた者が、「貧しい人に良い知らせを伝えると言い、「打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させる」と宣言しています。これは、人間ではなく、神様のご計画の告知なのです。そのことが、2節にある「主が恵みをお与えになる年」に起こるのだ、と語ります。ここで具体的にイメージされている年とは、「ヨベルの年」のことです。

レビ記 25 章に、ヨベルの年は、安息の年である 7 年目の 7 倍（49 年）の翌年＝50 年目にやってくることで、その年には全住民に解放の宣言が与えられ、どんな者も、奴隷も、おのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰ることが出来ると記されています。また、このヨベルの年には、土地を失い、負債の返済に苦しむ人々も、その土地が返還され、負債が帳消しになる、そのような一方的な恵み、大解放に与えられるという年なのです。ヨベルとは、雄羊の角笛のことです。それを鳴らしてその年の到来を告げるということが書いてあります。レビ記 25 章、どうぞお読み下さい。

…しかし悲しい事に、どうも現実のイスラエルの歴史の中で、**ヨベルの年の解放が実行されたことはなかった**ようです。戒めが与えられても、力を持つ者は自分の財の損になることはしなかったようです。ここにも人間の罪・エゴがありますね。

### [3] イエス・キリストによる真の解放

それでは、ここに記されている神様による救いのご計画は挫折してしまったのでしょうか？いいえ。それから 500 年以上の時が経ち、イエス・キリストが、ガリラヤでの伝道の開始の頃、当時巻物になっていたイザヤ書を開き、正にこのイザヤ書 61 章を、会堂で読まれた出来事が、新約聖書のルカによる福音書の 4 章 16 節以下に記されています。ここで主イエスは、驚くべきことを語っているのです。

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。

21 節で、主イエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われたのです！これまで実現しなかったヨベルの解放の年が、イエス様が

この預言の言葉を読んだ時に、事実となった、と言うのです。どういうことでしょうか？——イエス様が、**真の油注がれた者、メシア＝解放者**となって下さった、ということです。これまで人間の罪が、力の支配による人間関係が蔓延しているこの世界で、イエス様ご自身が、**本当に貧しい者、打ち砕かれた者、十字架へと引っ張られて行く、捕らわれ人**となって下さった、ということだと思います。—それは、**神の御子**であられるお方が、**私たちの身代わり**になって、です。神様はどんな者も、イエス様のゆえに、一方的な恵みで神の国に招いて下さったのです。主はもうこの時に、ご自分の**十字架の贖い**ということを決めておられたのではないのでしょうか？

### [結] リアルな救いを！

私はなと思うのですけれども、「**貧しい人に福音を告げ知らせる**」という時の、この**貧しさ**とは何か、ということです。この**貧しさ**とは、私は**神様との関係の貧しさ**、ということもあるのではないだろうか、と思いました。自分自身のことでもありますけれども、普段、なかなかそのことは気が付かないのです。しかし、ある時に自分では抑えられないような感情に捉われたり、身近な者に愛のない言葉を吐いてしまったり、或いは逆に、酷くさめた思いになっている自分にハッとさせられることがあるのです。そのような時は、他者をも自分をも受け入れられないようなことになってしまっている気がするのです。

…そんな私を本当に癒し、回復させてくれるものは、御言葉しかないのです。神様のもとに立ち返るしかないのです。この**貧しい者**に、いや、**貧しい者だからこそ**、イエス様は福音を繰返し繰り返し与えて下さるのだと思います。これは本当に感謝なことです。

この間ラジオを聴いていて、とても考えさせられたのは、ある詩人の方が、私たちは今、**ロボットの奴隷**になりつつあるのではないかと語っていたことです。今、人口音声で話しかけてくるスピーカー、また、ロボットのペット犬や、ペッパー君のようなものがどんどん増え、私たちがそれに対してまるで**感情を持った存在であるかのように関わってしまう**ことに、そのことによって、人間はロボットと同じようなものに「成り下って」しまうのではないかと、言っていました。

感情を持たないそのような存在に対等に向かい合うな！と言うのです。「あれはあくまでもただ電気で動く機械なのであって、あなたのことなどは何も考えていない。この世界のことも考えていない。**いのちがないもの**だから。そのようなものにあなたの一番大切な感情を注いでしまうと、あなたがロボットに心を持っていかれる、つまりその**奴隷**になってしまいますよ」と言うのです。本当にそうではないかなと思いました。

救いは、ロボットからではなく、いのちある神様からやってくるのです！「今日、この言葉は実現した」とおっしゃるイエス・キリストからやってくるのです！

神様は、ロボットのように、人間をどうしても良いもののように考えません。罪の力にひっぱられて行く私たち人間をなんとしてでも救いたい！とお考えになりました。イエス様は、ご自身、人間のために血を流されたお方です。その現実を、リアルな出来事を、よくよく考えてゆきたいと思います。

「ヨベルの年」ならぬ、私たちには、今が恵みの時、救いの日なのです。

イザヤ書 61 章 10 節の言葉をお読みしてお祈り致します。

「わたしは主によって喜び楽しみ わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。  
主は救いの衣をわたしに着せ 恵みの晴れ着をまとわせてくださる。」

主なる神様、感謝致します。

あなたは、独り子イエス・キリストのゆえに、私たちを、あなたの御国へと招いてくださいました。私たちは今、イエス様の十字架の贖いによって、あなたとの愛の関係を回復させて下さり、その確かな交わりに生きるようにして下さいました。罪ある人間を、罪あるままに受け入れて下さいました。だから私たちは平安です。喜びです。感謝です。

「心の貧しい者は幸いである」と、今日、イエス様は私たち一人ひとりに呼びかけて下さっています。どうか、悔いし砕けし心を持って、あなたと歩むことが出来ますように。この川越教会、小さいかもしれませんが、ここにも確かな神様の愛が作る共同体が作られていることを感謝致します。どうぞ、あなたが下さるヴィジョンと夢と一緒に持ちながら、さらに多くの方々を招く事が出来ますよう、私たちのわざをも励まして下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。